

研究報告

総合看護学実習における複数患者受け持ちによる実習効果
—成人看護学領域における検討—

松清 由美子 瀬川 睦子 長田 艶子
奈良県立医科大学医学部看護学科

The effect of taking charge of plural patients in comprehensive nursing practice
—Examination in the field of adult nursing —

Yumiko Matsukiyo Mutsuko Segawa Tsuyako Nagata
Nara Medical University School of Medicine Faculty of Nursing

要旨

総合看護学実習における複数患者受け持ちによる学びと実習効果、さらに卒業後の臨床現場での状況を明らかにすることを目的とし調査研究を行った。平成20年度から23年度に成人看護学領域で総合看護学実習を履修した学生に対して、自記式無記名質問紙によるアンケートを実施し、有効回答は32名(56.4%)であった。調査の結果、複数患者受け持ちによる学びとして「優先順位の判断」「時間調整の必要性」「行動計画の修正」「患者の個別性の理解」が明らかになり、複数患者の看護過程の展開および看護実践による学びであると推測できた。就職に対する気持ちでは「看護技術に自信がない」が94%と高い割合を占めていたが、50%の学生が複数患者受け持ちによる実習が、就職に対する不安軽減に効果があったと考えており、臨床現場へのスムーズな導入に対して一定の効果が認められた。複数患者受け持ちによる実習は、学生が卒業後に直面する様々な困難な看護実践を経験する機会となっていた。今後の課題として、来年度の新カリキュラムによる総合看護学実習に向けて実習指導方法および実習内容の検討の必要性が示唆された。

キーワード：複数患者受け持ち，総合看護学実習，看護実践能力

Abstract

A research study was conducted aimed at clarifying learning by taking charge of plural patients and effect of practice in comprehensive nursing practice, and moreover the situation in clinical practice after graduation. An anonymous, self-administered questionnaire survey was conducted on 32 students who took comprehensive nursing practice in the field of adult nursing from 2008 to 2011. As a result, "judgment of priorities", "necessity of time adjustment", "modification of the action plan" and "understanding patients' individuality" became apparent as learning by taking charge of plural patients, and then it was assumable to be learning by developing nursing process of multiple patients and nursing practice. As for feelings about getting a job, "have no confidence in nursing technique" accounted for 94% which was a high percentage, but 50% of students thought that practice by handling multiple patients had an effect on anxiety reduction in getting a job, and it showed certain effects on smooth introduction to clinical practice. Practice by taking charge of plural patients has been providing opportunities that students can experience various difficult nursing

practices that they face after their graduation. Issues of teaching methods of practice and contents of practice were indicated for comprehensive nursing practice based on a new curriculum which starts from next year in the future.

Key words : taking charge of plural patients, comprehensive nursing practice, ability to practices nursing

I. はじめに

看護学生の看護実践能力を強化するため、平成19年4月に取りまとめられた「看護基礎教育の充実に関する検討会報告書」を受け、保健師助産師看護師学校養成所指定規則の一部が改正され、看護基礎教育カリキュラムの改正がおこなわれた。これに伴い、各教育機関ではそれぞれに教育内容や教育方法を検討し、新カリキュラムとして平成21年度より適用され教育が行われている。

新カリキュラムでは、卒業後、臨床現場へのスムーズな導入を目的に「看護の統合と実践」分野が新たに設定された。この分野は、各分野で学習した内容をより臨床実践に近い形で学習し、知識・技術を統合する内容となっている。さらに、「看護の統合と実践」の臨地実習においては、看護基礎教育の課題を踏まえ、複数患者を受け持つ実習や一勤務帯の実習、夜間実習等により、臨床実践の中で必要な基礎的な知識と技術を統合的に体験する内容が示されている。

本学看護学科成人看護学領域では、新カリキュラム適用前の平成20年度より、4年次前期に履修する総合看護学実習において、複数患者受け持ちによる実習を実施している。この実習では「患者の優先順位を決定し看護計画立案ができる」「患者個々の状況に応じた看護を実践できる」「医療チームカンファレンスに参加し自らの意見を述べることができる」等の行動目標を設定し、看護チームの一員としてより臨床実践に近い形での実習を展開している。

他大学での複数患者受け持ちに関する研究は、平成19年の「看護基礎教育の充実に関

する検討会」の報告書以降、いくつかの教育機関から論文として発表されている。その中で、複数患者受け持ちによる実習効果として、個々の患者に必要な看護ケアを時系列に整理調整し、ケアの優先度を判断せざるを得ない状況が生じることで、学生は受け持ち患者の個別性の相違を認識し、看護実践の機会が多くなるため、患者の個別性に対応した応用看護技術を学習することに繋がる(良村, 2007)。また、複数の患者を受け持つ体験によって、学生は時間の使い方、行動の優先順位の判断、個々の患者への対応や観察の仕方などの学びと課題を得ることができる(漆坂, 2009)と報告している。

しかし、これらの研究はまだ数が少なく、効果的に実習を実施するための方法や内容の研究にいたっては殆どされていない。さらに、臨地実習で複数の患者を受け持った経験が、どのように卒業後の臨床現場へのスムーズな導入に役立ったのか、卒業生を対象にした研究は殆ど報告されていない。

成人看護学領域において複数患者受け持ちを総合看護学実習に導入して4年が経過しているが、来年度の「看護の統合と実践」分野の臨地実習に向けて、学生の実習目標の達成度や実習の学びから、複数患者受け持ちによる実習効果を検討する必要がある。

そこで今回、今後の総合看護学実習の実習形態・実習内容の検討への示唆を得るため、総合看護学実習終了後の学生および卒業生を対象に、複数患者受け持ちによる実習での学びと実習効果、さらに卒業後の臨床現場での状況を明らかにすることを目的として調査研究を行った。

本学看護学科での総合看護学実習の概要

4年次前期履修科目であり、「変化する社会のニーズに対応できる創造的、探究的問題解決能力の基盤を高め、看護の対象となる人々のQOL向上を支援する看護実践能力の進展を図る」を目的とした2単位(2週間90時間)の看護学実習である。

実習目標は、「課題の達成を目指して主体的に実習に取り組むことができる」「看護実践のプロセスを科学的に思考し、意味づけ、実践することができる」「保健医療福祉の連携と、関連職種の人々との協働について理解することができる」「看護の質を保証するための医療安全・危機管理について理解することができる」の4項目を設定している。学生は各看護学領域の中から履修する領域を自ら選択し実習に臨む。

用語の定義

複数受け持ちによる実習：複数患者を同時に受け持ち、看護実践を行う実習

II. 研究方法

1. 研究対象

- 1) 本学看護学科卒業生(以下、卒業生)のうち、平成20年度～22年度に総合看護学実習を成人看護学領域でおこなった卒業生53名。
- 2) 本学看護学科4年生(以下、4年生)のうち、平成23年度総合看護学実習を成人看護学領域でおこなった学生16名。

2. 研究期間

平成23年9月から平成23年12月

3. 研究方法

平成23年9月～10月の間に、独自で作成した自記式無記名質問紙を用いて、卒業生は郵送法、4年生は留め置き法とし回収箱にて回収した。

4. 調査内容

1) 複数患者受け持ちによる実習での学び

複数患者受け持ちによる実習での学びに対する質問項目は、成人看護学領域にお

ける行動目標をもとに8項目で構成した。選択肢は、「非常に思う」「やや思う」「あまり思わない」「全く思わない」の4件法とした。質問項目の内的整合性に関して、本研究でのクロンバックの α 係数は0.837であった。

2) 総合看護学実習終了から就職までの気持ちと実習効果

就職までの気持ちは、「働くのが楽しみ」といった肯定的気持ちの1項目と、不安を表す気持ちの6項目で構成した。選択肢は「非常に思う」「やや思う」「あまり思わない」「全く思わない」の4件法とした。質問項目の内的整合性に関して、7項目ではクロンバックの α 係数は0.515、肯定的な気持ちの1項目を除く6項目では0.709であった。さらに実習効果に関しては、総合看護学実習の経験が就職までの不安な気持ちの軽減に役立ったかの質問を設定した。選択肢は「非常に思う」「やや思う」「あまり思わない」「全く思わない」「わからない」の5件法とした。

3) 総合看護学実習の実習方法

臨床現場へのスムーズな導入のために望ましい総合看護学実習の実習方法として「複数患者受け持ち実習」「一勤務通した実習」「夜間実習」「看護管理実習」「機能別看護実習」「1病室受け持ち実習」の6選択肢より、複数回答とした。

4) 卒業生の配属部署と就職後の状況

卒業直後の配属部署は、内科系病棟、外科系病棟およびICU、救命センター、手術室とした。就職後の状況については、平賀ら(2006)の新卒看護師のリアリティショックに関する先行文献を参考に、就職して3か月間の精神的身体的症状7項目で構成した。選択肢は「常にあった」「時々あった」「一度はあった」「なかった」の4件法とした。本研究におけるクロンバックの α 係数は0.842であった。さらに、それら精神的身体的症状の要因について、13選択肢より複数回答とした。

5. データ分析方法

データ分析には Dr.SPSS II を使用した。各質問項目は記述統計を行い、複数患者受け持ちによる実習効果と実習での学びおよび就職までの気持ちとの関連に対して、複数患者受け持ちによる実習効果の「わからない」と回答したものを除き、「非常に思う、やや思う」としたものを思う群、「あまりそう思わない」としたものを思わない群とし、この2群間で複数患者受け持ちによる実習での学びの8項目および就職までの気持ちの7項目について Mann-Whitney(U) 検定を実施した。さらに、卒業後の配属部署と就職後3か月間の精神的身体的症状の関連に対して、Mann-Whitney(U) 検定を実施した。なお、有意水準は5%未満とした。

6. 倫理的配慮

本研究は、奈良県立医科大学医の倫理委員会の承認を受けた。研究対象者である卒業生および4年生には、研究の目的・方法について、研究協力は自由意志であり、研究協力を断っても何の不利益も生じないこと、さらに4年生に対しては、講義や評価等に何ら不利益が生じないこと、調査票は無記名のため個人を特定されることはないこと、調査票は鍵のかかる場所で保管し、研究終了後に細断処理すること、調査結果は本研究でのみ使用し、研究結果については論文発表を行うことについて文章で説明した。同意は調査票の返送、回収をもって得られたものと判断した。

III. 結果

調査票の回収数は32名(回収率56.4%)、そのうち卒業生19名(46.3%)4年生13名(81.2%)であった。

1. 複数患者受け持ちによる実習での学びおよび就職までの気持ちと実習効果

複数患者受け持ちによる実習での学びは表2に示す通りであり、8項目の中で「非常に思う」が最も多かったのは時間調整の必要性で16名(50.0%)であった。また、「非常に

思う、やや思う」の合計では、患者の個別性の理解が31名(96.6%)で最も多く、卒業後への自信が10名(31.2%)で最も少なかった。

次に、実習終了から就職までの気持ちは表3に示したが、看護師として働くのが楽しみといった肯定的な気持ちは「非常に思う」3名(9.7%)「やや思う」19名(59.4%)であった。反対に不安については、看護技術に自信がないが「非常に思う」15名(46.9%)「やや思う」15名(46.9%)であり、医療事故が不安では「非常に思う」11名(34.4%)「やや思う」14名(43.8%)であった。また、両質問のすべての項目において、卒業生と4年生との間で有意な差は認められなかった。

複数患者受け持ちによる実習効果として、就職までの不安な気持ちを軽減することに役に立ったかの質問に対して「非常に思う」1名(3.1%)「やや思う」15名(46.9%)、「あまり思わない」11名(34.4%)、「わからない」5名(15.6%)であった。

複数患者受け持ちによる実習効果と実習での学びの8項目および就職までの気持ちの7項目について比較した結果(表4)、有意差が認められたのは、時間調整の必要性、看護チームの一員としての行動、患者の個別性の理解の3項目であった(p<0.05)。

2. 総合看護学実習の実習方法

臨床現場へのスムーズな導入のために望ましいと考える総合看護学実習の実習方法は、複数患者受け持ち29名(90.6%)、夜間実習11名(34.4%)、一勤務通した実習10名(31.3%)、1病室受け持ち実習7名(21.9%)、機能別看護実習2名(6.3%)、看護管理実習0名であった。

3. 卒業生の配属部署と就職後の状況

卒業生の配属部署は表1に示す通りであった。

表1 卒業生の配属部署 (n=19)

| 外科系 病棟 | 内科系 病棟 | ICU | 救命センター | 手術室 |
|-----------|-----------|-----|--------|-----|
| 4 | 7 | 5 | 2 | 1 |

就職後から3か月間の精神的身体的症状8項目に対する結果は、表5の示す通りであった。その中で、「常にあった」と回答した項目は、精神的落胆8名(42.1%)、イライラ感4名(21.1%)、ストレスの蓄積12名(63.2%)、片頭痛2名(10.5%)、消化器症状2名(10.5%)、全身倦怠感6名(31.6%)であった。これら精神的身体的症状の要因としては図1に示す通り、知識の不足18名(94.6%)、看護技術への自信のなさ16名(84.6%)であった。また、卒業後の配属部署を内科系病棟とICU、救命センター、手術室を含めた外科系病棟に分け、配属部署と卒業後の精神的身体的症状の7項目について比較した結果、有意な差は認められなかった

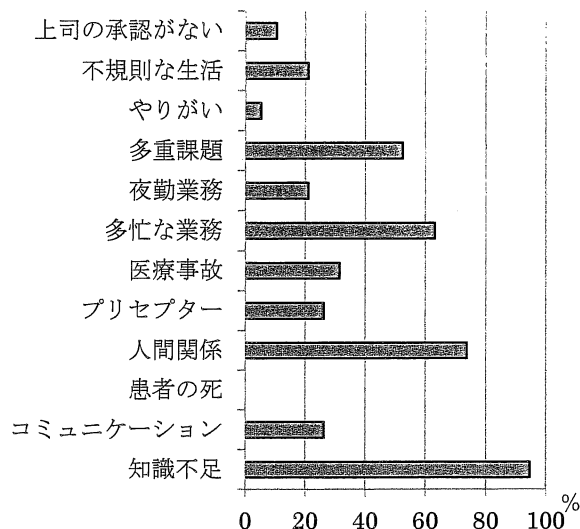


図1 精神的身体的症状の要因 (n=19)

表2 複数患者受け持ちによる実習での学び (n=32) 名 (%)

| | 非常に思う | やや思う | あまり思わない | 全く思わない |
|----------------|-----------|-----------|-----------|---------|
| 優先順位の判断 | 13 (40.6) | 14 (43.8) | 5 (15.6) | 0 (0) |
| 時間調整の必要性 | 16 (50.0) | 13 (40.6) | 2 (6.3) | 1 (3.1) |
| 行動計画の修正 | 10 (31.3) | 16 (50.0) | 5 (15.6) | 1 (3.1) |
| 看護チームの一員としての行動 | 7 (21.9) | 15 (46.8) | 10 (31.3) | 0 (0) |
| 他職種者との協働の重要性 | 5 (15.6) | 17 (53.1) | 9 (28.1) | 1 (3.1) |
| 患者の個別性の理解 | 14 (43.8) | 17 (53.1) | 1 (3.1) | 0 (0) |
| 卒業後のイメージ化 | 11 (34.4) | 13 (40.6) | 8 (25.0) | 0 (0) |
| 卒業後の自信 | 1 (3.1) | 9 (28.1) | 20 (62.5) | 2 (6.3) |

表3 就職までの気持ち (n=32) 名 (%)

| | 非常に思う | やや思う | あまり思わない | 全く思わない |
|--------------|-----------|-----------|-----------|----------|
| 働くのが楽しみ | 3 (9.4) | 19 (59.4) | 7 (21.9) | 3 (9.4) |
| 学生のままでいたい | 9 (28.1) | 9 (28.1) | 9 (28.1) | 5 (15.6) |
| 人間関係が不安 | 12 (37.5) | 11 (34.4) | 8 (25.0) | 1 (3.1) |
| 看護技術に自信がなく不安 | 15 (46.9) | 15 (46.9) | 2 (6.3) | 0 (0) |
| 医療事故が不安 | 11 (34.4) | 14 (43.8) | 7 (21.9) | 0 (0) |
| 夜間勤務ができるか不安 | 9 (28.1) | 8 (25.0) | 13 (40.6) | 2 (6.3) |
| 理由もなく不安 | 5 (15.6) | 11 (34.4) | 12 (37.5) | 4 (12.5) |

表4 複数患者受持ちによる実習での学びと実習効果との関連 (n=27) 名 (%)

| | | ①時間調整の必要性 | | | 合計 | p値 |
|------|------|-----------|----------|---------|----|--------|
| | | 非常に思う | やや思う | あまり思わない | | |
| 実習効果 | 思う | 12(75.0) | 4(25.0) | 0(0) | 16 | 0.039* |
| | 思わない | 4(36.4) | 6(54.5) | 1(9.1) | 11 | |
| 合計 | | 16(59.3) | 10(37.0) | 1(3.7) | 27 | |

| | | ②看護チームの一員としての行動 | | | 合計 | p 値 |
|----------|------|-----------------|----------|---------|----|--------|
| | | 非常に思う | やや思う | あまり思わない | | |
| 実習 効果 | 思う | 7(43.8) | 6(37.5) | 3(18.8) | 16 | 0.019* |
| | 思わない | 0(0) | 6(54.5) | 5(45.5) | | |
| 合計 | | 7(25.9) | 12(44.4) | 8(29.6) | 27 | |

| | | ③患者の個別性の理解 | | | 合計 | p 値 |
|----------|------|------------|----------|---------|----|--------|
| | | 非常に思う | やや思う | あまり思わない | | |
| 実習 効果 | 思う | 11(68.8) | 5(31.3) | 0(0) | 16 | 0.029* |
| | 思わない | 3(27.3) | 7(63.3) | 1(9.1) | | |
| 合計 | | 14(51.9) | 12(44.4) | 1(3.7) | 27 | |

Mann-Whitney(U)検定 *p<0.05

表 5 就職後から 3 か月間の精神的身体的症状 (n=19) 名 (%)

| | 常にあった | 時々あった | 一度はあった | なかった |
|---------|-----------|-----------|----------|-----------|
| 精神的な落胆 | 8 (42.1) | 11 (57.9) | 0 (0) | 0 (0) |
| イライラ感 | 4 (21.1) | 6 (31.6) | 5 (26.3) | 4 (21.1) |
| ストレスの蓄積 | 12 (63.2) | 5 (26.3) | 1 (5.3) | 1 (5.3) |
| 片頭痛 | 2 (10.5) | 5 (26.3) | 4 (21.1) | 8 (42.1) |
| 消化器症状 | 2 (10.5) | 5 (26.3) | 5 (26.3) | 7 (36.8) |
| 倦怠感 | 6 (31.6) | 8 (42.1) | 4 (21.1) | 1 (5.3) |
| 睡眠障害 | 1 (5.3) | 5 (26.3) | 2 (10.5) | 11 (57.9) |

IV. 考察

医療の高度化や入院患者の高齢化、患者の権利意識の向上、在院日数の短縮による重症患者の割合の増加など、看護職者を取り巻く環境の変化は著しい。このような現状の中で、看護職者には、主体的に考え行動することができ、保健医療福祉のあらゆる場において看護ケアを提供できる看護実践能力や、最適な医療を提供するために、チーム医療の調整役としてのコミュニケーション能力などが求められている（大学における看護系人材の在り方に関する検討会，2011）。しかし、看護基礎教育では、修得すべき内容が増大する一方、臨地実習時間内での修得には限界があり、卒業時の看護実践能力の強化が課題となっている。看護基礎教育の充実に関する検討会

（2007）は、看護基礎教育の現状と課題として「学生は臨地実習では一人の患者を受け持つが、就職すると複数の患者を同時に受け持

ち、複数の作業を同時進行で行わなければならない。」などとしている。

今回の調査結果より、8割以上の学生が複数患者受持ちによる実習で「学べた」とした項目は「優先順位の判断」「時間調整の必要性」「行動計画の修正」「患者の個別性の理解」の4項目であった。総合看護学実習で学生は、3年次までの領域別看護学実習とは異なり、複数の患者を同時に受け持つことで、看護ケアの優先順位に迷い、検査等の変更に伴う行動計画の修正に時間を要し、また限られた実習時間を有効に使うことができないなど、多くの課題に直面する。そして、学生はその課題に向き合いながら、複数患者の看護過程を展開し看護実践を行うことで、実習終了後にはその課題を学生なりに克服し「学び」として肯定的に捉えることができたと推測できる。その一方、「看護チームの一員としての行動」「他職種者との協働の重要性」の2項目を「学

べた」と回答した学生は6～7割程度にとどまっていた。総合看護学実習では、実習目標「保健、医療、福祉の連携と、関連職種の人々との協働について理解することができる」の中で看護チームのメンバーとして自らの意見を述べる事ができる、医療チームの中での看護師の役割について説明できる、看護職者と他職種者それぞれの専門性と協働について述べる事ができる等の行動目標を挙げている。しかし、複数患者の看護過程の展開や看護実践に重点が置かれており、この部分が不十分になっており、指導体制も整っていないのではないかと考えられる。そのことが、看護チームの一員としての行動や他職種者との協働の重要性の学びに繋がらなかったと推測できる。この結果より、今後は看護チームの一員として看護チームカンファレンスや他職種との医療チームカンファレンスへの参加、看護チームリーダーや受け持ち看護師への積極的な関わり、夜勤看護師への申し送りや一勤務通した実習等の実習内容を再度検討することで、より臨床での看護実践に近い形の実習が展開できると考える。

また、「卒業後の自信がついた」は、7割の学生が思わないと回答していた。学生は、実習での看護実践を通じて、看護師の優先順位の考え方や判断、患者個々への対応や観察の実際を通して、自分自身を振り返り、また半年後の自分に重ね合わせることで、自らの知識や看護技術の未熟さを痛感することとなり、この実習の経験が卒業後の自信には繋がらなかったと推測できる。このことは、就職に対する気持ちの結果にも表れており、9割以上の学生が、看護技術に自信がなく不安として捉えており、また、医療事故に対しても8割の学生が不安に感じていた。ただ、学生はこの経験を通して、就職やその後の看護師としての自らの課題を明確にできたのではないかと考える。

次に、複数患者受け持ちによる実習効果として、就職に対する不安軽減に役に立ったと思うかとの質問に対して、約半数の学生が役

に立たったと回答していた。この結果は、複数患者受け持ちによる実習で、全ての学生が卒業を前に自信を持って不安なく臨床看護師としてスタートできることになるわけではないが、臨床現場へのスムーズな導入に一定の効果はあったといえる。さらに、実習効果があったと思う群と、なかったと思う群間で、「時間調整の必要性」「看護チームの一員としての行動」「患者の個別性の理解」の3項目で複数患者受け持ちによる実習での学びに差が認められた。この結果と複数患者受け持ちによる実習での学びより、複数患者の看護過程展開と同時に、看護チームとしての行動や意識が持てるような実習内容の再検討が望まれる。また、9割の学生が複数患者受け持ちによる実習が卒業後の臨床現場へのスムーズな導入のための実習方法として望ましいと回答しており、総合看護学実習での複数患者の看護過程の展開や看護ケアの提供、看護チームの一員として臨床看護師と関わった経験等が、この結果に繋がっていると考える。

新人看護師は、看護基礎教育で学んだことと臨床看護の場で求められることへのギャップに戸惑い、ショックを覚え、看護実践の困難さを自覚するといわれている。そのような状況の中で、精神的身体的症状が出現する可能性がある。今回、卒業生に対して就職後3か月の状況を調査した結果、精神的落胆やストレスの蓄積など精神的症状は高い割合で見られていた。これらの症状の要因としては、知識不足・看護技術への自信のなさが8割を超えており、就職に対する気持ちの結果と一致していた。唐澤(2008)は、新人看護師の職務上の困難として「看護技術」「専門知識」「業務遂行」が困難の程度が高いと報告している。つまり、新人看護師は、自分の持っている知識と実際の患者の観察事項が結びつかず、患者の個別性に応じた看護実践ができない状況に陥っていると推測できる。これは、看護基礎教育における実習が限られた経験であるにも関わらず、就職後すぐに複数の患者を受け持ち、様々な処置や検査に伴う技術を

求められても対応ができないことに困難を感じているためと考える。

看護基礎教育の充実に関する検討会（2007）は、「学生は臨地実習の範囲や機会が限られる方向にあり、卒業時に一人でできる看護技術が少なく、就職後、自信が持てないまま不安の中で業務を行っている。」と指摘している。看護基礎教育では、基礎看護学実習の段階から、このような新人看護師が直面する問題を想定し、限られた実習の中で一つでも多くの看護技術を修得し、学生自らが主体的に問題を解決できる能力を養っていく必要がある。そのために、総合看護学実習を含め各領域別看護学実習の在り方を再度検討していく必要性が示唆された。

総合看護学実習における複数患者受け持ちは、学生が卒業後に直面する様々な困難な看護実践を経験する機会となり、それを通して自分自身を振り返り、今後の自らの課題を明確にすることができるようになる。学生は就職を目前に控え、自らの看護技術の未熟さや知識不足に不安を感じている現状が明らかになった。

今回の結果より、総合看護学実習における複数患者受け持ちによる学びの内容が明らかとなり、さらに臨床現場へのスムーズな導入に対しても一定の効果が認められた。しかし、全ての実習目標達成に向けて不十分な部分と課題も明らかになった。今後、より臨床での看護実践に近い形での実習内容や実習指導方法の検討の必要性が示唆された。

V. 研究の限界と課題

本研究では卒業生の回収率が低く、データが32名と少ないこと、さらに、縦断的調査ではなく、卒業生に関しては想起再生であるため、この結果を一般化するには限界がある。今後は、追跡調査によるデータの蓄積と経時的な実習効果の評価が必要である。

V. 結論

複数患者受け持ちによる実習での学びと実習

効果、さらに就職後の臨床現場での状況について、以下のことが明らかになった。

1. 複数患者受け持ちによる学びとして、「優先順位の判断」「時間調整の必要性」「行動計画の修正」「患者の個別性の理解」が明らかになった。
2. 複数患者受け持ちによる実習を経験した9割の学生は、臨床現場へのスムーズな導入に望ましい実習として複数患者受け持ちを支持していた。
3. 約半数の学生が、就職に対する不安に複数患者受け持ちによる実習は効果があったと考えており、臨床現場へのスムーズな導入に対して一定の効果が認められた。
4. 複数患者受け持ちによる実習は、学生が卒業後に直面する様々な困難な看護実践を経験する機会となっていた。
5. 新カリキュラムによる総合看護学実習に向けた実習指導方法および実習内容の検討課題が示唆された。

引用・参考文献

- 大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会（2011）：大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会最終報告。文部科学省。
- 後藤桂子，松谷美和子（2007）：新人看護師の看護実践を段階的に進める「総合実習」。看護展望，32（7）：31-38。
- 平賀愛美，布施淳子（2006）：新卒看護師のリアリティショックに関する文献を用いた構成要因の分類。北日本看護学会誌，8（2）：13-25。
- 唐澤由美子，中村恵，原田慶子他（2008）：就職後1か月と3か月に新人看護師が感じる職務上の困難と欲しい支援。長野大学紀要，10：79-87。
- 小林紀明（2008）：複数受け持ち実習の現状と有効性に関する一考察—学生の認識に焦点を当てて—。目白大学健康科学研究会，第1号：111-119。
- 看護基礎教育の充実に関する検討会

(2007)：看護基礎教育の充実に関する検討会報告書。厚生労働省。

看護教育の内容と方法に関する検討

(2011)：看護教育の内容と方法に関する検討会報告書。厚生労働省。

中山洋子 (2010)：看護基礎教育のこれからの方向性。日本看護教育学会誌, 20 (2) : 47-60.

高橋秀子, 松岡清子, 梶喜子他 (2007)：複数受け持ち制実習から総合実習への展開。看護展望, 32 (79) : 23-30.

高谷真由美, 桑子嘉美, 吉田澄恵他 (2007)：複数患者受け持ち実習と実習効果。看護展望, 2 (7) : 16-22.

佐居由美, 松谷美和子, 平林優子他 (2009)：看護基礎教育の看護実践とのギャップを縮める総合実習の効果－看護学生から臨床看護師へ－。聖路加看護学会誌, 13 (1) : 24-34.

漆坂真弓, 木村紀美, 村田千代他 (2009)：成人（基礎）看護領域における看護総合臨床実習の学びと課題－レポートの分析を通して－。弘前学院大学看護紀要, 4 : 25-35.

良村貞子, 岩本幹子, 青柳美智子他 (2007)：複数の患者を受け持つ看護管理学実習の展開。看護総合科学研究会誌, 10 (2) : 65-71.